

桜の咲かない春（後編）

今日くさり

○ 高校 教室

授業中。自習時間。

教師 2、教卓で作業している。

生徒達、会話をしたり、勉強をしたりしている。

松下、卒業までのカウントダウンを眺めながら静かにクッキーを食べる。

「残り3日」と書かれたカレンダー。

竹内、振り返って松下の視界を遮るように動いてみるが、松下の視線は変わらない。

竹内「朝日」

松下「んー？」

竹内「何見てんの？」

松下「何見てると思う？」

竹内「お前めんどくさ」

松下「ねえ」

竹内「何」

松下「僕達って友達？」

竹内、目を見開いて松下の前で手を叩く。

松下、我に返って竹内を見る。

松下「何」

竹内「おかしくなっちゃったのか」

松下「は？」

竹内「卒業するのが寂しくて、俺に会えなくなるのが寂しくておかしくなっちゃったのかお前」

松下「寂しくなっていないけど」

竹内「じゃあなんでそんなこと聞くんだよ」

松下「いや：：竹内、俺のことどう思ってるのかなって」

竹内「：：俺のこと好きなの？」

松下「もううるさい」

竹内「好きなの？ねえ朝日」

竹内、前のめりになって松下に寄る。

松下「自分が友達だと思ってても、相手が友達だと思ってるとは限らないだろ？（竹内を落ち着かせて）だから、俺が友達だと思ってる人に聞いてみたかっただけ」

竹内「朝日……」

松下「……何」

竹内「友達に決まってるんじゃない。いや、親友と言ってもいいね」

松下「親友まで到達した覚えはないけど」

竹内「朝日が転校して来て俺の隣に座った時、なんか分かんないけど話してみた。思ったんだよ。新しく入った奴だから揶揄おうとか、好奇心とかそんなじゃない。朝日と友達になりたいって、思ったの」

松下「……へえ」

竹内「お前あんま喋らなそうじゃん？そ

したら本当に喋らない奴で、イメージ通りだと思っただら尚更面白くて。でも話はよく聞いてくれるから、俺の悩みとか、沙羅の話とか、購買の期間限定メニューの話とか、あ、俺の先輩の名前まで覚えててくれたろ？あれは嬉しかったなー」

松下「竹内」

竹内「もう卒業だし言うよ。俺は朝日と友達になれて良かった。今思えば喋ってるの俺ばかりだったけど、お前のこと何も知らないかもしれないけど、それでも俺は朝日のこと友達だと思ってるから」

松下、竹内を見る。

竹内、クッキーを一つ取って食べる。

松下「あっ」

竹内「(食べながら) 友達だから、な」

松下「友達って言葉利用するな」

竹内「この前弁当も財布も忘れたお前に
パン奢ってやっただろ！」

松下「見返りは要らないって言ってたじ
ゃん」

竹内「それとこれとは別だね」

松下「お前が繋げたんだろ」

教師2「ちよっとそこ、自習時間です
よ」

竹内「やべ」

竹内、前を向く。

教師2「ちよっと！竹内君何食べてる
の、何の時間だと思ってる

の！？」

竹内「いやこれは」

竹内、後ろを向いて松下を見る。

松下、クツキーの袋をしまい窓の外
を見ている。

竹内「お前……」

教師2「あとで職員室来て」

竹内「ええ……」

松下、竹内を見て少し笑う。

○ 同 教室

夕方。

松下、席に座っている。

寛、教室のドアを開けて入る。

寛「原稿出来たのか」

松下「いえ、出来てません」

寛「出来てないのになんで呼んだんだ

よ。ていうかお前が職員室に来るの

が普通だからな」

松下「僕らしいスピーチをするには、先

生の力が必要なんです」

寛「……」

寛、松下とは離れた席に座る。

松下「僕は、周コノハさんのことが好き

です。だから僕は、彼女だって、

僕の恋人だって、言いたいなっ

て、思っていました」

寛「……そうか」

松下「でも、言えませんでした。花火大会の夜に会ったあの日から、彼女に一度も会っていない。校舎裏に行っても、校内を探してもいない。連絡先も、彼女のフルネームも聞いていなかった。自分が本当に情けないと思いました。けど、あの時から一秒も忘れたことなんてなかった。いつも周さんが僕の中にいるんです。先生、周さんの居場所知ってるんですよね？ 会わせてくれませんか」

寛「……会ってどうする」

松下「え？」

寛「会って何がしたい？告白か？不登校の理由を聞くのか？」

松下「それは……」

寛「……人生をやめたいと言ったことがある」

松下「え？」

寛「授業の板書が読めない、文字を書くことも出来ない、先生が作ったテストも答えられない、大好きな小説の内容が分からない。生きていても何の意味もない。人生やめてしまいたいって、周が」

松下「……」

寛「でもある日、好きな物は好きなままで良いつて言ってくれたんだって、笑って話してくれた。好きな物を嫌いだって投げ捨てそうになったら、僕が受け止めて好きにして戻すよって、松下朝日って人に言われたんだって」

○ 回想 病院 個室

周、ベッドに座っている。
寛、ベッド横の丸椅子に座っている。

周「素敵な人でしょ？先生」

笥「まあ、綺麗事だな」

周「また先生はそうやって。私はあの人に救われたんだよ？たとえ綺麗事でも良いんだよ。綺麗事でも、綺麗なままならそれで良いの」

笥「：：いつ退院すんの？」

周「分かんない。パパもママも教えてくれないし、多分もうしないんだと思うよ」

笥「そんな訳ない。絶対大丈夫だって」

周「（笑いなながら）先生。それは綺麗事に入らないの？」

笥「あ：：」

周、笑う。

周「あの人、私のこと好きなんだ。すごく好き」

笥「すごい自信だな」

周「だって私があの人のこと好きだから。同じ気持ちの目をしてた」

覚、周を見つめる。

周「先生」

覚「ん？」

周「もし彼を見つけても、私の場所は教
えないで」

覚「なんで？会いたくないのか」

周「彼には彼の人生があるの。彼は私の
ことが好きだし、私も彼のことが好
きだけど、愛情は人生の糧にはなら
ない」

○ 高校 教室

覚「アサヒなんて名前、ここには俺とお
前しかいないから。お前を見つける
のに時間は掛からなかった」

松下「生徒全員の顔と名前、覚えてるか
らですか？」

覚「あー、まあな」

松下「どこの病院にいるんですか」

覚「言えない」

松下「なんで」

笥「守秘義務ってやつ、プライバシーの保護ってやつ」

松下「体育の先生にも、家庭科の先生にも怒られる先生が守秘義務守れるわけないでしょ」

笥「お前なんでそれを……それとこれとは関係無いから」

松下「会わせてください」

笥「駄目だ」

松下「でも」

笥「お前が出来るのは、スピーチだけ」

松下「は？」

笥「原稿出来たら呼べ」

笥、ドアを開けて教室から出ていく。

松下「来てくれるんだ……」

○ 日替わり 高校 教室

午後。

チャイムが鳴る。

「残り〇日」と書かれたカレンダー
し。

教室のドアが開いて、算が入って来
る。

松下「え」

竹内、振り返って算を見る。

算「あー、ゆっくり準備して良いから。

まだ予鈴だし」

算、パイプ椅子を用意して本を開
く。

生徒1「あの、田畑先生は」

算「本鈴鳴ったら話す」

松下、算を見つめる。

チャイムが鳴る。

生徒が席につく。

算「田畑先生が急用でいなくなったの

で、代わりに来ました筧です」

竹内「いなくなっただって……」

生徒、ざわつく。

松下、筧の顔を見る。

筧「お前らはもう自習期間だろ？ 田畑先生の時は何してるか知らないけど、隣のクラスと奥の職員室に迷惑掛けないくらいに遊んでいいから。はい、始め」

生徒、ざわつく。

女子生徒 1 「先生」

筧「ん？」

女子生徒 2 「先生の授業受けたいです」

筧「……は？」

松下「は？」

竹内、松下の方を振り向く。

竹内「やっぱ筧って人気あるんだ」

三吉「ミステリアスなんだって」

竹内・松下、三吉の方を向く。

三吉、ノートを広げて勉強をしている

る。

竹内「ミステリアス？ただの変なやつじ
ゃん」

三吉「いつ見てもやる気ないし、誰も知
らない本読んでるし、話し方もゆ
っくりでなんか鈍そう。でも背高
くてイケメンで、授業は面白くて
生徒思い。罪な男だって」

竹内「……三吉、寛のことそんな風に思
ってたの？」

三吉「姉ちゃんのクラスの担任だったん
だよ。もし会ったら写真撮って来
いって言われてる」

三吉、寛に向けてスマホを向ける。
寛「スマホ使っていていいとは言っていないか
ら」

三吉「すいませーん」

三吉、シャッター音を鳴らして写真
を一枚撮りポケットにしまう。

竹内「あのボサボサがイケメンねー」

三吉「惹きつける所があるんじゃない

の」

松下、寛を見つめる。

寛、女子生徒に囲まれている。

寛「分かった。席につけ」

女子生徒達、微笑みながら席に座る。

寛「今から話すけど、聞きたくないやつは別に聞かなくていいから。あ、でも、スマホは出さないように。音楽聴いたりSNS見る時間じゃないからな」

寛、チョークを取り出す。

松下、黒板を見る。

寛「せっかくだから、もうすぐ卒業するお前らに世の中というのはどんなものか教えてやる。特に一組は四月から社会に出たり、大学に行くやつよりも世に出るのが早いやつがいるな。だから、今から話すことを頭の

片隅にでも入れておいて欲しい。あ、何回も言うけど、聞きたくないやつは聞かなくて良いから。聞く気のないやつには何を言っても無駄だから。これも社会に出たら使える豆知識だ」

寛、黒板に「寛朝陽」と書く。生徒が全員黒板に目を向ける。

寛「俺の名前は寛朝陽と言います。二年三組の副担任で、現代文を担当しています。たまに古文もやるかな、嫌いだけど」

寛、「朝陽」に赤丸を付ける。

寛「名前が、朝陽。ああ、このクラスの松下と同じ読み方で、違う漢字な」

寛、松下の顔を見る。

数人の生徒、松下の方を向く。

松下、俯く。

寛「朝陽って名前、俺はずっと嫌いだった。なんでだと思う？」

男子生徒 1 「先生の性格に合っていないから」

生徒数人、少し笑う。

寛 「（笑いなながら）まあそうだな。ほぼ正解だけど」

寛、名前の隣に大きく朝日の絵を描く。

寛 「朝日っていうと、どんなことを思い浮かべる？」

生徒 「……」

寛 「例えば……朝、とかさ」

寛、絵の横に「朝」と書く。

男子生徒 2 「光、輝いてる」

女子生徒 3 「明るい、元気、とか」

男子生徒 3 「眩しい、起きるの嫌になる」

生徒数人、笑う。

寛、出てきた言葉を絵の周りに書き出す。

寛 「松下。お前はどっと思う？」

松下「え」

寛「アサヒって言葉に、どんなイメージを持ってる？」

松下「……何かを照らしている、他の何よりも目立っている、イメージで

す」

寛「うん」

寛、黒板に「照らす」「目立っている」と書く。

寛「朝日のイメージはこれ。じゃあ」

寛、朝日の絵の隣に簡単な自画像を描く。

女子生徒4「それ誰ですか？」

寛「俺」

生徒、笑う。

寛「俺のイメージは？なんでもいいよ」
生徒、ざわつく。

寛「お前らもうすぐ卒業だろ？変なこと
言ったって成績下げたりしねーよ。
俺にそんな権限無いから」

生徒、笑う。

男子生徒4 「何考えてるか分かんない」

女子生徒5 「不思議な人：：？」

男子生徒5 「めっちゃ猫背。実は根暗」

女子生徒6 「静かな時もあるし、グラウ

ンドで他の先生に怒られて

る時もある。大人っぽいけ

ど子供っぽい、とか」

男子生徒6 「実はめっちゃ変態とか」

生徒、笑う。

笥、出てきた言葉を絵の周りに書き出す。

笥 「まあ散々言われたけど、俺のイメー

ジはこんな感じかな」

笥、教壇から降りる。

笥 「同じ朝日なのに、こんなに違う。同

じ名前なのに、こんなに見方が違

う。でも、朝日って名前を聞いて感

じるのは（朝日の絵を指さして）こ

っちだろ？でも俺に会う人はこのイ

メージから段々（朝陽の絵を指さして）こっちになっていくんだ。不憫だと思わないか？」

寛、教壇に上って「寛朝陽<朝日」と書く。

寛「俺はこの名前のせいで、初対面の人には明るくて元気で皆のことを照らす目立ちたがり屋だって印象を持たれた。でも実際は、どちらかということ暗いし元気なんてないし皆のことを照らすほどバイタリテイは無いし出来るだけ目立ちたくない。そんな人間なんだよ。だから、勝手にイメージを付けられるこの名前が、嫌いだった」

生徒「……」

寛「でも仕方が無い。既存の名前を新しい何かに付けてしまったら、同じようないメージを持つことは当たり前前なんだ。でもな、これは名前だけじ

やない。これからお前らは、俺と同じような経験をする。名前なんてほんの一例で、見た目が良いか悪いのか、学歴がどうか頭が良いか馬鹿なのか、家族がどんな人間なのかで自分を判断されることだってある。人は事実より自分の偏見が勝つ生き物だから。でもお前らにはそういう人になつて欲しくない。根も葉もない噂や自分のイメージより、人や物の本質を見抜け。目先の面白さじゃなくて、将来に繋がる人間関係を築け。良い大人は、無意識にそれが出来る。俺みたいに」

生徒「……」

箕「……笑えよ」

生徒、拍手しながら笑う。

松下、箕を見つめている。

教師3、教室のドアを開ける。

教師3「先生！何してるんですか」

寛 「え、授業ですけど」

教師 3 「授業で拍手は生まれられないでしょ

う」

生徒、小さく笑う。

寛、少し頭を下げる。

松下、寛を見つめている。

○ 回想始め 高校 校舎裏

周 「嘘か本当か分からない噂に惑わされて、本当の自分なんてどこにもいない。物事の本質は、偏見や噂に惑わされずに自分で確かめないといけないのに」

○ 回想終わり 同 教室

寛 「根も葉もない噂や自分のイメージよ
り、人や物の本質を見抜け。目先の
面白さじゃなくて、将来に繋がる人
間関係を築け」

○ 高校 教室

チャイムが鳴る。

寛、前のドアから教室を出る。

松下、勢いよく立ち上がり、後ろの
ドアから教室を出る。

○ 同 廊下

松下「先生！」

寛、後ろを振り返る。

松下「ありがとうございます」

松下、深く頭を下げる。

寛、松下に近づく。

松下、顔を上げる。

寛「じゃあお礼に、最高のスピーチ原稿

頼んだ」

松下「え……」

寛、笑って去って行く。

○ 松下宅 父の部屋の前

松下、ドアをノックする。

父「はい」

松下「俺。入って良い？」

父「ああ、いいよ」

松下、ドアを開けて部屋に入る。

○ 同 父の部屋

父、パソコンを見つめている。

壁一面にある本棚のほとんどが「月下真昼」と書かれた本。

松下、部屋を見渡す。

壁が本棚で埋め尽くされていて、ほとんどが「月下真昼」の小説。サイドテーブルには資料や原稿などが置いてある。

松下「仕事中にごめん」

父「いや、もう終わるところだったんだ。腹減ったし。もう夕飯出来たかな」

松下「うん：：多分」

父、手を止めて松下の方を向く。

父「何かあったか？」

松下「いや……」

松下、俯く。

父「なんだよ」

松下「僕の名前、どうして朝日なの？」

父「え？」

松下「聞いたことなかったなって思っ

て」

父「……朝日のおかげで、自分が好きになつたからかな」

松下「え？」

父「朝日が生まれる頃、執筆の停滞期に入つて何もしけないし何も思いつかなかつた。でも朝日が生まれるから俺が頑張らないといけないって考えすぎて、毎日が夜の暗がりみたいな気持ちだった。朝日が生まれた日、晴天だった。冬の寒い日で、寒波が続いてたのに数か月ぶりに朝日がよく見えますって天気予報でやつ

てたんだ。真っ暗な世界にいたはずなのに、窓から差し込む朝日を見ただけで、まだ俺はやれるって思えた。自分の書くものに自身が持てた。だからお前には、生きていくだけで誰かを動かす人になって欲しいと思ってつけた」

松下「……僕はそんなたいそうな人間にはなれないよ」

父「たいそうな人間？……ごめん、勘違いさせたな。人を元気づけて欲しいんじゃない、自由に生きて欲しかったんだ」

松下「自由に、生きる」

父「朝も昼も夜も、俺らの動きは関係なく過ぎていくだろ？時間よ止まってくれ！って何度願ったことか。でも朝日は自由なんだ。ただそれを指標に人間は生活しているだけ。自由で正直な人になって欲しい。朝日らし

さが分かる人と一緒に過ごせたら良
いと思っただんだ」

松下「僕らしさ」

父「そう。お前は、お前で良いんだ」

○ 日替わり 高校 教室

夕方。

「残り一日」と書かれたカレンダー
」。

教室には、松下・笥の二人だけ。

笥、教卓の近くにパイプ椅子に座っ
て原稿を読む。

松下「どうですか」

笥「んー？」

松下「僕らしいですか」

笥「んー……」

笥、原稿を読み進める。

松下「転校してきた僕を卒業生代表に出
来る先生は何者ですか」

笥「んー……」

松下「先生は、人が好きですか」

笈「原稿を読み終えて机に置く。

笈「好きだよ。醜くて残酷で自分勝手

で。こんな自由な生物他にいないか

ら」

松下「動物、ですか」

笈「それなのに、自分達で作ったルール

に縛られて生きてるし、理性を保つ

て人と馴染むことが当たり前前の世の

中に仕上げてる」

松下「先生もその動物の一人ですよ」

笈「だから面白い。自分の中に何人も

自分がいる人間は本当に面白い。だ

がその面白さは、言葉にしないと分

からない。だから俺は、国語を教え

てる。自分の使っている言語がどれ

だけ奥が深くて、どれだけ曖昧で、

どれだけ自分を表現するのに使える

かを教えたい。そう思って教師にな

った」

松下「先生は、やっぱり変な人ですね」

箕「高二の秋に転校してくる奴に言われたくないね」

松下「それは」

箕「それも、お前の人生だよ。過去には戻れないし、失ったものもたくさんあるかもしれないけど、その分をこれから取り返せ」

箕、松下に原稿を返す。

箕「お前らしい」

松下、原稿を見つめる。

○ 高校 教室

卒業式の朝。

松下、カウントダウン「残り1日」を剥がし「残り0日」が見える。生徒が教室で話している。全員の胸には花がついている。

田畑「一組廊下並んで」

生徒「はい」

松下、席から立ち上がる。

竹内「朝日」

竹内、立ち上がる。

松下「ん？」

竹内「緊張してんの？」

松下「……体育館で話すのなんて、小学

校の発表会ぶりだ」

竹内「練習でもステージ立っただけで、

話さなかったしな」

松下「……なんか、寒気してきた」

竹内「気のせいだよ、大丈夫。俺がいる

からさ」

松下、笑う。

竹内、つられて笑う。

竹内、教室を出て廊下に並ぶ。

松下、教室を出ると、職員室前に立
っている筈を見つける。

寛、頷く。

松下、つられて頷く。

○ 同 体育館

生徒「卒業生の入場です」

体育館のドアが開き、卒業生が入場するのと同時に拍手が起こる。

松下・竹内、歩き出す。

○ 病院 屋上

周、ベンチに座っている。

スマホが鳴る。寛から電話。

周「もしもし」

寛（声）「あ、起きた？今病室？」

周「屋上。先生がスマホ使用エリアにいらって言ったんじゃない」

寛（声）「屋上ってスマホ使っていないの？」

周「……聞くの忘れちゃった」

周、辺りを見回す。誰もいないこと

を確認して、ポケットからイヤホンを取り出す。

○ 高校 体育館

田畑 「三年一組、起立」

生徒、立ち上がる。

代表生徒、ステージに上がり証書を貰う。

寛、体育館の入口を開けて静かに入りステージ脇に並ぶ教師達の後ろに立つ。

教頭 「寛先生」

寛 「はい」

教頭 「もっと前に」

寛 「いえ、僕は。三年の先生達が優先ですから」

寛、後ろを向いてスマホを操作する。

在校生「最後になりましたが、卒業生の皆様のこれからのご活躍とご健康をお祈りし、お祝いの言葉とさせて頂きます。在校生代表、片淵沙羅」

体育館中に拍手が響き渡る。

竹内、涙を流す。

松下「泣き過ぎだって」

竹内「だって……沙羅が……」

在校生1「続いて、卒業生代表、三年一組、松下朝日さん」

松下「はい」

松下、立ち上がりステージまでの道を歩く。

寛、ステージに上がった松下にスマホを向ける。

教頭「先生、何してるんですか」

寛「僕の大事な生徒の晴れ舞台なので」
ビデオ通話になっているスマホ。相

手は周。

○ 病院 屋上

周、スマホを見つめる。

○ 高校 体育館

松下、ステージに上がり原稿を広げる。寛と目が合う。
寛、松下に向かって微笑む。

松下、息を吸う。

松下「厳しい寒さの中にも時折感じられる春の陽気に包まれるこの良き日、多数の方々のご臨席を賜り、このような盛大な卒業式を開いて下さったことに、卒業生を代表して心から感謝申し上げます。といっても、僕がこの高校で過ごしたのは一年と少しです。三年間通った訳ではないし、五十二期生の皆や先生方とたくさんさんの苦楽を共に

した訳ではありません。せいぜい玄関の一番左側のドアの開きにくさに対抗したり、購買は朝のHR前に買いに行かないとパンが全て売り切れていることに落胆したり、文化祭で配られたアイスを友達と奪い合って全部床に落として食べれなくなったりしただけです」

竹内「（笑いながら）ろくな思い出ねえな」

松下「なので、皆さんを代表して物を言うことは出来ません。その代わりに、この場を借りて僕の話をしようと思えます」

体育館中がざわつく。

教頭「寛先生これは」

寛「（人差し指を自分の口にあてて）し

ー！！」

教頭、驚く。

算、スマホを向け続ける。

松下「僕は父の転勤でこの高校に転校して来ました。ですが、父の職業は小説家なので家を変える必要はありません。本当は、前の高校でいじめられてこの高校に来ました」

生徒、ざわつく。

竹内、松下を見つめる。

生徒「（隣にいる竹内に） そうなの？」

竹内「……いや、初めて聞いた」

松下「僕はある日をきっかけに全校生徒から無視されるようになり、先生でさえも味方してくれない状況に耐えきれず、転校を決めました。なのでこの高校では、それを隠して過ごしました。嫌われないように、いじめられていたことがバレないように、一日一日をやり切らなければと不安でいっぱいでした。でも、そんな不安は転校した

初日に打ち砕かれました。初日に
友達が出来たからです。昼ごはん
と一緒に食べてくれたり、自分の
大切な人を紹介してくれたり、自
分の悩みを赤裸々に話してくれる
友達が出来ました。僕は、今の僕
を理解してくれる友達：：親友に
出会えて本当に良かったと思って
います」

竹内「朝日：：」

松下「この高校では、大切な人がもう一
人出来ました。僕が僕のままとい
て良い、僕は一人じゃないと、教
えてくれました人です」

○ 回想 病院 個室

周、ベッドに座っている。

寛、横の丸椅子に座っている。

周「でね、先生」

寛「ん？」

周「お願いがあるの」

箕「何？」

周「彼が卒業するまでに、彼が彼自身を好きになって欲しいの。自分のことを好きになって欲しい」

箕「うん」

周「だから先生が、彼の魅力を引き出してあげて」

○ 高校 体育館

松下、ステージに上がり生徒を見ている。

松下「僕は逃げるようにここに来ました。僕にとってこの高校はただの待機場所で、次の場所に進むまでの通過点だと思っていました。でもそうじゃなかった。ここは僕のターニングポイントで、来なければいけない場所で、大切な思い出になりました。きっとここにいます」

卒業生は、三年間でそれを培ってきたのだと思います。在校生の皆さんは、これからもっと大切な場所になるのだと思います。今隣にいる友達や先生、家族、大切な人というこの時を楽しむことを忘れないで下さい。僕達も、ここで過ごした時間を糧に生きていきたいと思えます」

松下、原稿を畳む。

松下「最後に、僕にこのような機会を与えてくれた算先生。そして、僕と一緒に過ごしてくれた皆さん、本当にありがとうございます」

松下、深く頭を下げる。

少しずつ拍手の量が増えていく。

竹内、手を叩く。

算、涙を流して笑う。

○ 病院 屋上

周、スマホを膝に置いて小さく拍手する。

看護師「コノハちゃん」

周、後ろを振り返る。

看護師「探したんだから。何見てる

の？」

周「：好きな人のスピーチです」

周、スマホを眺める。

○ 高校 教室

三年一組の札。

生徒達、教室で話している。

竹内、後ろを振り返り松下を見る。

竹内「なんで教えてくれなかったんだ

よ」

松下「え？」

竹内「その：：」

松下「いじめられてたって？」

竹内、頷く。

松下「言ったら、見る目変わると思った

から」

竹内、松下の両頬をつねる。

松下「（つねられながら）なにすんだよ」

竹内「（つねりながら）そんな訳ないだ
ろ！」

松下、竹内の手を振り払う。

竹内「いや、正直分かんない。なんでい
じめられたんだろうとか、ヤバい
奴なら話しかけないでおこうと
か、思っちゃったかもしれない
な。その時の自分が何するかなん
て、その時にならないと分かんないし。でも、話したかったのは事
実だから。友達になりたかったのは事
は事実だからな。忘れんなよ、親
友」

松下「……ありがとう」

教室の後ろのドアが開く。

生徒「算先生」

松下・竹内、算を見る。

箕、松下を見つけて手招きする。

○ 同 廊 下

箕「卒業おめでとう」

松下「ありがとう、ございます」

箕「俺が添削した文章なだけあって、素
晴らしいスピーチだった」

松下「面白くないって返されただけです
けど」

箕「でも最後まで惜しかったな。アドリ
ブ入れやがって」

松下「え？」

箕「俺に感謝しなくて良い。というか、

俺が頼んだってのは秘密だったんだ
よ」

松下「……え、そうなんですか」

箕「俺の少ない少ない人脈を使ってどう
にかお前を卒業生代表にしたんだ
よ。それが全校にバレた。このあと
教頭に呼ばれてる」

松下「……可哀想ですね」

笥「お前のせいだからな」

松下「どうして、僕にスピーチをさせた

んですか」

笥「それは、頼まれたから」

松下「誰に」

笥、紙を渡す。

笥「良い経験出来て良かったな。ありが

とうって言ってこい」

松下、紙を開く。

笥「あ、田畑先生の話聞いて、クラスメ

イトと写真撮って、親に感謝して、

それから行け。一生に一回しか無い

卒業式に、悔いなんて残すな」

松下「……はい」

笥、微笑んで松下の頭を撫でる。

○ 病院 屋上

松下、息を切らしながら屋上にたどり着く。

周、ベンチに座っている。

松下「周、コノハさん」

周、振り返る。

松下、周に近付く。

周「先生から聞いたんですか？」

松下「え？」

周「ここにいるって」

松下「ああ：：うん」

周「言わないでって言ったのに」

周、立ち上がる。

周「卒業、おめでとうございます」

周、松下の胸の花をつつく。

松下「あ：：：ありがとうございます」

周「ボタン、一つない」

松下「ああ、これは」

周「女の子にあげたんですか」

松下、首を横に振る。

松下「男友達：：あ、親友が、どうして

もくれて言うから」

周「ええ？」

松下、ポケットからボタンを取り出す。

松下「なんでかそいつと交換した。でもそいつは彼女に第二ボタン渡してたから、僕は……第三くらい」

周、笑う。

周「スピーチ、見ました。やっぱり物語に引き込むのが上手ですね」

松下「物語って」

周「朝日さんの話だもん。それも物語でしよう？」

松下「そう、だね」

周「……ごめんなさい」

周、頭を下げる。

松下「え」

周「急にいなくなっちゃって」

松下「あ、いや、病状が悪化したからって先生から聞いたし」

周「でも連絡くらいすれば良かったなっ
て」

松下「いや、連絡先知らなかったから。
文字、打てないだろうし、病院だ
と電話も、ね」

周「……はい」

松下「生きてて良かった。生きてるだけ
で、十分だよ」

周「……また、本の内容教えてくれます
か」

松下「もちろん」

周「月下先生の次回作はいつ発売です
か」

松下「えっと、原稿は出来てたから夏前
には……あ」

周、笑う。

松下「なんで」

周「箕先生が教えてくれました」

松下「……ごめん、黙ってて。隠すつも
りは無かったんだけど」

周「良いんです。でも、これからはたく
さん教えてください。本のこと、

朝日さんのことも」

周、微笑む。

松下、つられて微笑む。

○ 高校 正門

桜の木。花は咲いていない。

筧、桜の木の写真を撮る。

終